

佳作

ピアノを続ける理由

徳島県 徳島文理小学校六年 竹内 佐那

私は三才のころからずっとピアノを習っている。そして毎年発表会に出ている。その発表会がある時期になったら、ピアノの先生が提案してくださった二、三曲の中から、今年の発表会でひく曲を決める。当たり前のことなのだが、年齢が上がるにつれて、ひく曲もどんどん難しくなっていく。

ピアノを始めたばかりのころは、『お誕生日マーチ』や『ソナチネ』などをひいていたのが、今になるとショパンの『ノクターン』などの難しい曲をひくようになってきた。難しい曲は上手にひくと、とてもかっこいいのだが、上手にひけるようになるための練習が大変だ。特に私は譜読みが苦手なので、何日も何週間も、たくさんの時間をかけて譜読みをする。時には泣きながら練習することもある。もう練習したくないと思っても、上手にひけるようにな

った自分の姿を想像して、がんばる。するとちよつとだけ上手にひけるようになる。そしてもっとがんばろうと思う。それをくり返して、時々家族に「がんばれ、がんばれ」とはげましてもらいながら練習をくり返していく。そして、通してひけるようになったら、もうこっちのもの。一つの大きな山をこえたようなものだ。

そこからはリズムの微調整を行って、リズムが安定してきたら次は暗譜をする。暗譜が終われば、もう発表会でひいても良いような完成度になっている。その後は発表会まで、その完成度が落ちないように、毎日練習を欠かさずしなければならぬ。練習をしても上手になっっていることを実感できないことは、とてもつまらないので、つつい練習をさぼりたくなるが、ピアノは一日さぼると、その分を取り戻すのに三日かかるといわれているので、なるべく練習はさぼらないようにする。そして、発表会の一週間ほど前になると、とても緊張してくる。発表会は何度出ても緊張する。発表会の前日になると夜なかなか寝れなくなってしまう。寝てしまったら、発表会の日が来てしまう。そう思ってしまったて、どうしても寝られないのだ。

そんな感じで、ついに発表会の日が来た。ドレスを身に付けて、ヒールの高いくつをはいてかみをセツトして、発表会の会場へ向かう。そして、舞台裏にスタンバイする。舞台裏には、舞台でだれかがひいているピアノの音がひびいてくる。そのピアノの音が聞こえるとてもとても緊張してくる。自分の心臓の音が聞こえてくる。そしてついに私の出番、その時、頭の中が真っ白になることがよくある。でも、大丈夫、間違えたっていい。自分の力を出し切るぞ！と、心の中で叫びながら、舞台へ出ていく。大勢の人が見てくれている前で私はピアノをひき始める。私が奏でる音楽をたくさんの人に聞いてもらえてうれしい。あきらめずにたくさん練習してよかったな、と思いながらピアノを無事にひき終わる。たくさんの人のはく手に囲まれながら舞台を下りていく。私は、その数分のために練習する。これからもずっとピアノを続けていきたい。